

東京都選手団の戦い

文責 強化委員長 小林 隆雄

今年の南関東大会は、6月15日から18日まで前橋市正田醤油スタジアム陸上競技場で行われた。新潟で行われるインターハイ出場へ、東京都選手団の健闘ぶりを皆様にご報告致します。

今年の関東大会では3つの東京都高校新記録が誕生した。女子七種競技において伊藤 明子（田園調布学園）が高校2年生としては歴代3位に相当する5025点を獲得した。また、女子3000mでは八王子高校の谷萩 史歩が9分19秒38をマークし12年ぶりに都記録を更新した。女子の最終種目となった4×400mリレーでは白梅学園が3分44秒50という好タイムで終始先頭を譲らず優勝を果たした。いずれもインターハイでの活躍が楽しみである。

今大会の結果、東京都からは男子が延べ29種目と3チーム、女子は延べ24種目と5チームが新潟インターハイへの出場を決めた。特に女子は両リレーを含め6種目に優勝し、インターハイ出場数が7つも増えるという活躍であった。

◎関東大会にさきがけて・・・

東京都総体を終え関東大会の間に、東京都選手が活躍した。まずは、6月2・3日に長野県松本市で行われた日本ジュニア混成競技選手権で女子七種競技に出場した伊藤 明子（田園調布学園）が4890点という東京都高校新記録をマークして優勝した。大学1年生を含めた強豪がひしめくこの大会での優勝は非常に価値がある。

また、6月8日から大阪・長居陸上競技場で行われた日本選手権では、男女の1500mで2人の選手が躍動した。男子では打越 雄允（久我山）が予選で3分46秒74という自己の持つ東京都高校記録を更新する好記録をマークした。女子では卜部 蘭（白梅学園）が4分22秒20で第6位に入賞する健闘を見せた。ともに大学生・社会人をふくめた日本選手権での活躍で、東京都の高校生選手に大きな勇気を与えてくれたと確信する。

◎大会初日（6月15日金曜日）

曇り空のもと開会式を終え、10時からいよいよ競技開始です。

男子ハンマー投

南関東大会最初の決勝種目は、男子ハンマー投であった。東京都大会で優勝した小林 祐貴（成城）は2投目に53m37の自己新記録をマークしてトップに立った。やはり、フィールド種目において序盤に優位に立つと展開に余裕が持てる。小林は4回目以後も積極的な投げをしたがファールとし記録を伸ばせず2位とした。4回目に51m77の自己ベストをマークした北詰 修三（日体荏原）が6位に滑り込んだ。最初の種目から自己記録連発で東京都選手団に勇気を与える幸先の良いスタートを切った。

男子400m

トラック競技でも東京都選手の勢いが際立った。予選1組で丸池 優太（昭和一学園）が47秒80、3組で田辺 将大良（東京）が47秒82と各々が自己ベストで1着通過をした。ともに余裕を残した走りに見受けられ決勝に期待がもたれた。1組で3着清水 勇也（東京）4着白石 浩之（立教池袋）

が48秒44とプラス2の同タイムとしてともに決勝に進み9名での決勝となり、東京都からは4名が決勝に進出した。決勝では、田辺が終盤素晴らしい伸びを見せ47秒37で2位に、丸池も良く伸び47秒60で3位に、白石も終盤良く粘り48秒09で5位と3名がインターハイ出場を決めた。残念ながら7位となった清水も48秒47で6位と100分の5秒差と健闘した。

女子400m

女子最初のトラック競技決勝であるこの種目では、東京都大会優勝の利藤 野乃花（白梅学園）が予選3組で55秒51の自己ベストをマークし独走の1着通過。予選2組では安西 この実（白梅学園）と及川 夏菜（都駒場）が1・2位で決勝に駒を進めた。決勝では利藤がスタートからリードを保ち最後の直線で、800m日本選手権入賞の実力者福里 秋帆（神奈川・川和）との競り合いとなった。その結果、100分の3秒差とわずかに先着を許し55秒46の自己新で2位とした。安西も56秒16の自己新で5位に入賞しインターハイ出場を決めた。55秒台が4名、6位入賞までが56秒31とハイレベルの決勝となった。

男子1500m

激戦が予想されたこの種目、予選から厳しいレースが繰り広げられた中、都勢は健闘し5名が決勝へ進出した。しかし、実力者の武田 凜太郎（早実）が故障のため欠場したのは残念であった。決勝では昨年インターハイで2位とし、前週の日本選手権で東京都高校新記録をマークしている打越 雄允（久我山）に期待がかかったが、前週の疲労からかあまり無理をしないレース展開で進んだ。結局3分56秒63で3連覇は逃したが、5位に入賞しインターハイでのリベンジを期待することとなった。東京都勢選手は複数が入賞すると思われたが関東の壁に阻まれた印象が強かった。

女子やり投

トップ8に残ったのが38m03とやや低いレベルとなったこの種目だが、東京都から出場した選手たちは皆助走のリズムが狂っていたのか、持ち前の投げができずにいた。唯一自己ベストをマークした都大会6位だった荒木 麻佑（東京成徳）が8位に入ったのが最高であったのは誠に残念であった。この試合でベストをマークすることの大切さを改めて痛感した。

男子走幅跳

やや強めの追い風の中行われ、風に惑わされることなく助走を合わせることができた選手はしっかりと記録を残していた。その中で、東京都大会優勝の間中 太亮（日大豊山）は1年生ながら安定した助走と踏切から6位で後半の跳躍に入った。迎えた最後の6回目に7m14の自己新をマークし3位に入る勝負強さを見せた。東京高校の内川 佳祐は7m02で6位に滑り込んだ。やや助走スピードが上がりすぎていて踏切が合わず有効試技が2回しかなかったことは今後の課題だが、跳躍自体には躍動感がありインターハイで期待できそうだ。

女子5000m競歩

インターハイに出場できるのはこの大会4位まで。今回の4位入賞は26分32秒であることから東京都では更なる強化が必要と痛感した。また、4名の東京都選手のうち2人が失格となったことも今後の課題であると感じた。今大会では都大会で優勝した吉田 百見（都文京）が27分17秒59と健闘はしたが7位が最高であった。持久力と筋力の強化が必要とされる上、独特な動きを習得しなければいけないというこの種目の特性を十分理解し更なる強化をしなければいけない。

女子走高跳

昨年、インターハイの決勝まで進出した伊藤 明子（田園調布学園）をはじめ実力者が都大会で落選

した事もあり今大会の東京都選手は苦戦した。その中で、根岸 志帆（戸板女）は唯一1 m 6 4をクリアインターハイ出場を決めた。その勝負強さは素晴らしかった。しかし、1 m 6 4でインターハイに出場出来たことを考えれば他の選手にも十分チャンスがあったのではないだろうか？やり投げ同様、周りの雰囲気に関わらず平常心を保つことができる力を身につけて欲しい。

男子棒高跳

今大会の8位でさえ4 m 5 0であったが、都大会の優勝記録は4 m 3 0である。東京都選手たちには苦戦は承知の上での挑戦であった。その中で田代 丈（東京）は1年生ながら都大会の記録4 m 2 0を20 cm上回る4 m 4 0をクリアする健闘を見せた。昨年度インターハイ優勝者は東京都の選手である。がんばろう。

◎大会2日目（6月16日土曜日）

明け方から雨が降り、小やみになる時もあったが結局は終日降り続けた肌寒い1日であった。

男子砲丸投

この日最初の決勝種目。朝一番で肌寒く、更には雨ですべりやすい最悪のコンディションの中、序盤は低調な記録での投げ合いとなった。当初14 m 5 0くらいがベスト8入りの条件かと予想したが13 m 9 7にまで下がっていた。その中で、東京チャンピオン幸田 和記（東京）は終始2位で6投目を迎えた。その最終投擲で15 m 9 4をマークし大逆転で優勝を果たした。全国でも上位にランクされていただけにややもたついた試合展開としたことは反省材料だろう。昨年インターハイ優勝した先輩に報いるためにも新潟では大投擲を期待したい。

男子100m

予選を通過した東京都選手は半分の3名。しかし、準決勝を勝ち残り決勝に残ったのは糟谷 翔（堀越）のただ一人とさびしかった。その糟谷は10秒88で6着となったが、速報では7位と同着で発表された。すぐさま訂正されたが僅差で先着した執念は見事であった。しかし、昨年の関東新人では入賞者が複数いただけに不本意な結果と言えよう。

男子5000m

昨年は東京都選手が上位3位までを独占したこの種目。その3選手が今年も出場するとあって期待を持ち観戦した。スタートから快調なペースでレースは進み3000mを通過したあたりではほぼ7名が先頭集団を形成していた。その中で、久我山高校の打越 雄允がラストのペースアップにも対応し2着でゴールした。14分15秒96の自己新記録という好タイムであった。また、菊池 聡之（岩倉）は14分35秒04の自己新記録ながら7位というレベルの高いレースであった。結局インターハイに進めたのは打越ひとりとなったのは残念であった。

男子400mH

東京都大会で大会新記録をマークしていた田辺 将大良（東京）が好調であった。前日の400mでも2位に入賞しており自信を持って予選を走った。決勝でも自身のレース展開を貫き、得意のラストでは先頭にあとわずかまで追い上げた。その結果、52秒23の自己新記録で2位とした。東京都記録も視野に入れることができる好記録でのレースはまさに「快心」であった。予選54秒10とプラスで決勝に進出した高山 和城（郁文館）は53秒91と記録を伸ばし健闘したが7位としたのは残念であった。

男子八種競技

二日間にわたって行われたこの種目。5515点で都大会優勝の栗原 彰理（都東大和）は最初の種目の100mから順調に得点を重ね初日をトップで折り返した。得意種目の多い二日目も雨の中奮闘し着実に加点し優勝を確実なものにして最終種目1500mを走った。トータル5555点とし自己新記録で優勝を飾った。3位に入賞した右代 啓欣（東京）は前半6位で折り返し、1500mのスタート時には4位であった。決して得意種目ではなかったが4分40秒00で走り逆転でインターハイ出場を決めた。都大会から200点以上加点したのは見事だった。そして、兄の右代 啓介選手はロンドンオリンピック出場を決めており兄弟揃って其々の大舞台で戦うこととなった。

女子100m

今年の東京都女子短距離は「強い」の一言だ。12秒01の自己ベストで優勝したのは高森 真帆（東京）、2位藤森 安奈（東京）、4位杉山 奈詠（八王子）と3名がインターハイへ駒を進めた。高森は中盤からの伸びが素晴らしくゴール前先行する藤森を捉え最初にゴールラインを切った。藤森は故障から全力での走りを控えた結果の2位で全国でのリベンジを自らに誓った。

女子1500m

初日に予選を走り、都勢からは卜部 蘭（白梅）、谷萩 史歩（八王子）の2名が決勝に進んだ。決勝では卜部が終始先頭集団を形成し自分のレースに徹した。前週の日本選手権での疲れがあったのか最後のスパートにいつもの切れがなく先頭についていけず4分24秒61の2着とした。谷萩も最後まで健闘し走り切ったが4分27秒37の自己ベストではあったが9着と入賞を逃した。

女子400mH

予選を通過し決勝に進出した都勢は、着順で香坂 さゆり（白梅学園）、長畑 瑠子（都文京）、プラスで佐藤 あゆ子（早実）、柳下 美佐子（戸板女）の4名。今大会自己記録連発の香坂は各ハードルを詰まり気味でクリアしながらも走力で粘り1分02秒03で4着とした。また、100mHが専門の佐藤が劣る走力をハードリングでカバーし5位に入った。長畑・柳下の両名が7・8位とインターハイを逃したのは残念であった。

女子円盤投

昨年インターハイ出場を果たせなかった東京都選手だが、今年も関東レベルではやはり苦戦を強いられた。その中で、昨年の関東新人・東京都大会優勝の武末 優（東京）に期待が持たれたが34m17で昨年と同じ7位で再び涙を流した。だが、吉田 佳菜（専修大附）が奮起し34m74をマークし2年生ながら5位に入りインターハイ出場を決めた。決してレベルが高いとは言えなかった今大会で結果を出せなかったこの種目の強化方法を再検討する必要があると痛感した。

男子4×100mリレー

前日の予選で40秒台をマークしたのが相洋・川崎橘の2校とともに40秒68の大会新記録。41秒49までがプラスで決勝に進んだ。東京都からは都大会優勝の八王子だけが41秒46で決勝に臨んだ。決勝では各校予選ほど記録は伸びず川崎橘が40秒87で先着し、八王子も41秒65で5位に入った。予選に出場した東京都各校のバトンパスに加速感がなくタイムをロスする場面が多いことが今後の改善点ではないだろうか？

女子4×100mリレー

予選1組では白梅学園が1着で、3組では東京高校と八王子が1・2着で危なげなく決勝に駒を進めた。決勝では、相洋がリードする中、東京高校がエース藤森を外したオーダーながら3走高森からの加速力で終盤抜け出し1年生アンカー武田が先頭でゴールした。東京高校は藤森抜きオーダーながら予

選・決勝とも46秒台をマークし改めて層の厚さを示した。2着に白梅学園、3着に八王子と東京都が上位を独占したのは素晴らしい結果であり、ここしばらく記憶にない快挙でもあった。今年の子の強さを象徴する結果ではないだろうか？

◎大会3日目（6月17日日曜日）

朝のうちは時折激しく雨が降ったものの、競技が始まると晴れ間の覗くまずまずのコンディションであった。

男子やり投

朝9:30からの決勝。アップ中は雨が降りなかなか身体を作るのが難しかった。実力を発揮することができなかった選手が多かった中、板橋 悠人（穎明館）、森田 政樹（都成瀬）、山下 大輔（東大附）、堀口 諒太（東京実業）の4名がトップ8に入った。後半記録を59m83に伸ばした板橋が3位に、56m台の森田が5位、山下が6位とした。55m42の堀口は助走が定まらず本来の投げができず8位に甘んじた。

男子200m

予選が行われた午前中は向い風が吹くコンディション。その中、東京都チャンピオンの徳岡 隆之介（八王子）は21秒72で1着通過。400mですでにインターハイ出場を決めている丸池は3着ながら21秒68の好タイムで決勝へ進んだ。決勝の時間は強い追い風となり参考記録（+2.6）ながら徳岡が21秒28で2着、丸池も良く粘り21秒43で6着に滑り込んだ。徳岡はスタートから飛び出しスピードを保ったまま終盤もリズムを崩すことなく素晴らしい走りを見せた。今年の200mは全国的にレベルは高いが、期待していいだろう。

男子800m

決勝へ進むには厳しい予選3組2着+2。その中、都大会で激戦を勝ち抜いた東京都勢は健闘した。その予選を1分53秒台で1着通過の三武 潤（城西大城西）、54秒台で2着通過の白石 浩之（立教池袋）、そしてプラスながら53秒台の塩谷 洋（都三鷹）54秒66の織田 修平（保善）の4名が決勝進出を決めた。決勝ではやはり実力者の三武が集団を引っ張る形となり終始先頭でゴールまで走り切った。優勝タイムは1分52秒29と地区予選では最上位級。塩谷・白石も終盤までしっかり走り切り5位6位ながら1分53秒91の同タイムでインターハイ出場を獲得した。インターハイでの活躍が期待される3名だが、高いレベルであった東京都大会を戦った全ての選手のためにも全国では最後まであきらめずに戦ってほしい。

男子5000mW

気温・湿度とも上がり始めた時刻にスタートしたこの種目。東京都大会で入賞した4名のうち3名が失格となる厳しいレースとなった。しかし、都大会3位で出場した川上 勇一郎（明大中野）は都大会から2分以上タイムを短縮する23分29秒80をマークして7位に入賞する健闘を見せた。インターハイ出場はならなかったが短期間で急成長を遂げた努力の成果は大いに評価できる。まだ2年生だけに来年に期待したい。

男子走高跳

今年の南関東地区では特出した選手がなく「混戦」で「1m98あたりで6位が決まるのでは？」と予想された。東京都から出場した6選手は全て1m90をクリアし、続く1m95も3名が越え期待がもたれた。しかし、1m98は誰も成功することができなかった。結局、この1m95で運命が分かれ

た。1 m 9 8 をクリアしたのは全体で5名。1 m 9 5 を1回目でクリアし試技内容から4名で6位決定戦が行われた。東京都からは先崎 航（都つばさ）、松鶴 竜二郎（都武蔵野北）がその中に含まれていたが、インターハイ出場はならず涙をのんだ。昨年同様「試技の差」により運命が分かれた結果となった。

女子200m

予選1組で高森 真帆（東京）24秒77、2組で杉山 奈誇（八王子）24秒45、3組で利藤 野乃花（白梅学園）24秒78と全ての組で都勢が1着通過。25秒26で走った寺田 梨紗（城西大城西）がプラスで拾われ4選手が決勝へと進んだ。3.7mの強い追い風の中、杉山が23秒86という参考記録ながら素晴らしい走りを披露した。高森が24秒16で3位、寺田が24秒54で5位、同タイムで利藤が6位と4名ともインターハイへ進んだ。東京都女子スプリントの強さを証明できた結果と言えよう。だが、全国優勝を目標としていた東京チャンピオン藤森 安奈（東京）が故障から落選したのは残念であった。回復を祈るばかりだ。

女子800m

東京都大会で優勝している北村 夢（東京）が予選を2分14秒60で2着通過。プラスは2分15秒27までであったが都勢からは北村一人が決勝のスタートラインに立った。決勝では日本選手権で入賞している福里 秋帆（川和）と先行タイプの平野 綾子（横須賀）の2名が他を大きく引き離してレースを進めた。ゴールでは平野が先着し2分08秒18の好タイムで優勝した。北村も入賞争いのラストを良く粘り2分14秒48の5着でゴールし念願のインターハイ行きを決めた。

女子走幅跳

競技開始時には風がなく落ち着いていたが後半では追い風が強くなり1回ごとに目まぐるしく順位が変わる展開となった。その中、東京都勢は1回目に國分 春菜（東京）が5m57を跳びトップで前半を折り返した。しかし、4回目以降追い風を受けた各選手たちは記録を伸ばし林 小百合（八王子）が5m72を跳び優勝。佐野 恵（都文京）が5m57で5位、同記録ながら國分が昨年と同じく6位に残った。國分は都大会で6位に甘んじたが関東では2年連続しての入賞。全国に出るために、この試合に合わせる事の大切さを証明した。

◎大会4日目（6月18日月曜日）

最終日も雨は降らなかったものの、ホームストレートは強い向い風。最後まで東京都選手は健闘した。

男子110mH

一昨年・昨年は東京都から5名がインターハイに出場したこの種目。しかし、今年はまだ14秒台をコンスタントに出す選手はなく苦戦が予想された。やや強い向い風の中予選を迎えたが、都大会優勝の坂本 景（東京）は1.5mの中14秒89の自己新をマークしたほか、栗原 彰理（都東大和）、向井 頌之（開成）前田 洋志（東京）が準決勝に進出した。準決勝各組4着を勝ち抜けたのは坂本・栗原の2名のみであったが、決勝では風が追い風になり坂本が14秒71、栗原が14秒74と共に自己記録を更新し4位5位に入賞した。

男子3000mSC

前日の予選では1組で荒木 数也（久我山）、西谷 泰介（麻布）の2名が、2組では東京チャンピオンの新島 英虎（久我山）が通過し決勝へ進出した。決勝では西谷が序盤先頭を引っ張り積極的なレースを展開したが途中転倒するアクシデントもあり順位を落とした。その中、新島は終始安定したペー

スで進み、9分22秒56をマークし3位でゴールした。荒木も諦めず健闘したがあと一步及ばず7位に泣いた。

男子三段跳

追い風の中行われたこの種目。1回目はみな助走が合わずファールする選手が相次いだ。2回目以降は風にうまく乗れた選手が記録を伸ばし優位に試合を進めることができた。東京都勢では佐々木 恭平（都青梅総合）が2回目に14m65を跳び2位につけた。以後もコンスタントに跳躍し14m75をマークし3位とした。終盤5回目に14m85を追風参考ながら跳んだ内川 佳祐（東京）が一気に順位を7位から2位にあげて自校の総合優勝に望みをつなげた。また、坂口 篤志（東亜学園）も4回目に追風に乗り14m56で5位に順位を上げてインターハイ行きを決めた。しかし、都大会優勝の石川 颯（東京）は助走が合わずトップ8に残れなかった。

男子円盤投

昨年は東京都勢が大会記録を連発し盛り上がったこの種目だったが、今年は40mをこえて関東大会に出場してきたのは幸田 和記（東京）ただ一人。その幸田は2投目に41m59を投げて3位で後半に入った。気持ちを切り替えて迎えた4投目に自己記録に迫る43m66をマークし2位とした。幸田は砲丸投で優勝しており東京都投擲陣のエースとして新潟で戦うこととなった。また、荒川 涼太（都武蔵野北）も健闘し39m14と都大会より記録を伸ばしたが8位で涙をのんだ。

女子100mH

東京都大会優勝の武山 詩歩（東京）は都大会後足首を捻挫し十分な練習ができないままの出場となった。昨年7位のリベンジをしたかったはずだが思うような走りができず準決勝で再び涙を流すこととなった。また、都大会2位の佐藤 あゆ子（早実）は故障で予選から、3位の速水 舞（都駒場）は七種競技との掛け持ち出場であったため準決勝からこの種目を棄権した。東京都選手で準決勝に進出できたのは武山、速水、そして1年生の柳沢 萌香（都片倉）の3名だったが、決勝に残った選手はおらず残念な結果となった。

女子3000m

ここ数年、東京都からこの種目でインターハイへ行く選手を出すことができなかったが、今年は違った。谷萩 史歩（八王子）が好調で、スタート直後から先頭集団の中でペースを保ちレースを進めた。終盤もスピードが落ちることなく優勝を争ったが最後は3位でゴールを駆け抜けた。そのタイム9分19秒38は自己記録を10秒以上更新するとともに12年ぶりに東京都高校記録をも塗り替えた。実に見事な走りであった。また、土田 美優（順天）も必死に粘り走り抜いたが9分34秒30で8位にとどまった。

女子砲丸投

この種目も昨年はインターハイに出場できなかった種目。しかし、今年は3名がインターハイ行きの切符を手に入れた。昨年1年生ながら7位とした長沼 瞳（郁文館）が6投目に12m60を投げ2位に入り初のインターハイ出場を決めた。同じく6投目に12m13を投げた晴山 江梨花（東京）が3位に続いた。そして、8位でトップ8入りした新崎 美深（東京）は4投目に11m90の自己ベストをマークし1cm差で6位に入った。都大会5位だった新崎は昨年から1m以上自己記録を伸ばしての全国出場である。

女子4×400mリレー

都大会終了時点で全国ランキングトップの白梅学園は、予選から唯一3分50秒を切り強さを示した。

東京高校も相洋高校と競り合い2着で予選を通過し2校が決勝に進んだ。決勝でも白梅学園は一度も先頭を譲らない「ぶっちぎり」のレース展開で3分44秒50の大会新記録・東京都高校新記録で優勝した。白梅はエースの利藤が1走を務め断然のリードを確保して有利な展開でレースを進めていくが、2走以後もその差をなかなか詰めさせない粘り強い走りができるのが素晴らしい。全国でも優勝目指して逃げ切ってもらいたい。東京も3分48秒52のチームベストで3位に入り全国大会でも決勝に進めることができる力を証明できたと感じた。

男子4×400mリレー

毎年思うが、全国屈指の「激戦区」。この地区のマイル決勝は「厳しい」の一言である。予選では3分17秒台でなければ決勝に進めない。西武台千葉はじめ全国ランキング上位がひしめく中、東京高校と八王子高校はきっちり1着で予選を走り決勝進出を決めた。決勝では目まぐるしく順位が変動する中、両校も必死に喰らいついていた。アンカーがスタートする時点では川崎橘、相洋、西武台千葉が先頭を争い東京がそれに続いた。東京のアンカーは400m2位の田辺 将大良。田辺はラスト100mまででしっかりと前との距離を詰めておき得意のラストスパートでゴール前わずか3mで先行する川崎橘を抜いて2連覇を果たした。3分13秒12のタイムで実に見事なレース展開であった。八王子もアンカー大澤が終盤良く走り同じく3分13秒台で5位とした。7位となったが3分15秒37にまでタイムを短縮した城西大城西も立派なレースであった。だが、7位が3分15秒台であることも脅威である・・・まさに全国大会決勝並みのリレーを見ることができた。

男女総合

4日間の競技の結果、男子は東京高校がマイルリレーの優勝で総合優勝を決め5年連続6回目の総合優勝を果たした。女子においては、2日目を終えた時点では白梅学園がリードしていたが、最終日の砲丸投で複数入賞した東京が逆転し4年ぶり4回目の総合優勝を果たし2回目のアベック優勝を飾った。白梅学園が2位、八王子が4位に入り東京都女子の活躍を語った。

総評

男子は、昨年からインターハイ出場種目を大幅に減らした。特に、昨年活躍が目覚ましかった短距離・長距離での入賞数が減ったのが原因と思われる。優勝種目も昨年は4都県で最も多かったが、今年はわずか4種目にとどまった。しかし、昨年ほどの活躍ではなかったものの全国でも優勝・上位入賞を狙える選手が多くいる。是非、全国大会までにしっかりと調整し万全で新潟に出向いてもらいたい。

しかし、男子とは反対に女子は昨年から大幅にインターハイ出場数を増やした。特に短距離の活躍は目覚ましく、リレーにおいては両種目を制したとともに400mリレーでは1・2・3位を独占した。さらに、100m・200mでは4名が決勝まで進出している。全体的にも6種目に優勝し全国での優勝候補も複数存在し、その活躍が今から楽しみである。また、インターハイに出場できなかった種目も4種目に減った。特に2年続いてインターハイ出場がなかった3000mと砲丸投でも出場を勝ち取った。

来年のこの大会（埼玉県・熊谷市）では是非とも4都県で最多のインターハイ出場者を輩出したい。と強く感じた。また、そのための強化施策を講じていきたい

最後になりましたが、南関東大会に出場された選手・先生方ご苦労様でした。

新潟インターハイでは「勝ちに行きましょう」